

国東紀行

仏の里めぐり

浜田平士

(会員・米水津村宮野浦)

夜来の雨も上がった十一月十八日早朝、「米水津歴史を知る会」十五人(うち史談会員九人)と、佐伯五人の合わせて二十人による研修旅行の出発です。行き先は国東方面、車は予定通り十時頃杵築城廣場に到着しました。杵築では高橋会員と大分師範で同期の後藤安臣氏が、説明役を引き受けてくれました。

杵築はもと木付と言い、温暖な気候と恵まれた山海の幸で生活できた地域だったのでしょうか。その海と川と断崖に囲まれた、要害堅固の台地に城が築かれました。城主は建長二年(一一二〇)、大友氏二代親秀の六男親重以来、大友家が三百四十四年間、そのあと正保二年(一六四五)、能見松平氏四代英親以来、松平家が明治四年の廃藩まで二百七十七年間、合わせて六百二十余年間統



北浜番所と冠木門(杵築)

治が続いています。昭和四十五年には新城を復興して、昔を偲ぶことができます。

城内には、藩主ゆかりの遺品と共に、当地出身の三浦梅園・重光兄弟・豊田大將・綾部・一松と、かつての日本を導いたトップの人達を紹介しています。この

小さな町から、どうしてこの様な優れた人達が輩出したのか不思議です。武家屋敷や商家の造り、大原郎や数々の寺社等見ても、歴史の深さが偲べれます。昼食は我が村竹野浦出身の三股茂樹君が経営する、「杵築ふるさと産業会館」で済ませました。

午後は中野酒造・中野庄屋敷・重光家と見学して、車は二一三号を北上です。途中奈多八幡社に参拝しました。白砂青松の海岸ですが、松喰虫の被害には案じられます。ここで後藤氏とはお別れです。今日一日親切丁寧な説明は、恐縮の至りでありました。

二一三号は道路脇の花壇にもいろいろな仏塔が置かれ、

仏の里観光にふさわしい道として整備されています。程なく車は望海苑に着きました。

翌十九日は八時の出発です。この日は市野瀬氏が前もってお願ひしていた、山本師章氏が案内役を勤めてくれました。前記の二方と同様、大分師範の同期だそうです。

はじめは安国寺に参詣しました。應永元年（一三九四）、足利尊氏公開基の臨濟宗妙心寺派の禪寺です。日本中にある同名六十八ヶ寺のうち、六十八番目に建てられたと言います。山本氏の紹介により住職の説明を受けましたが、同行の小林会員（竹野浦潮月寺住職）とは旧知の仲と聞きました。往時は七堂伽藍が完備していたとのことですが、約四百年前兵火に遭いました。大友・島津の戦いです。その後再建された茅葺きの山門と、門前に立つ運慶作の仁王像は目を引きました。本堂は釈迦牟尼仏・文殊菩薩・普賢菩薩の三尊仏を本尊とし、観音菩薩・地藏菩薩も安置されています。足利尊氏公の木像は、威風堂々たるもので、県指定の重文です。また、延命地藏尊立像は鎌倉時代の作とかで、かの大石内藏助も祈願されたという仏像です。明治三十九年京都山科より移管されました。ほかに石風呂や数多くの寺宝がありました。

そこから国東町立歴史民俗資料館に行きましたが、途中安国寺遺跡では工事中でした。館内には縄文・弥生・古墳・古代・中世と、数々の文化財が展示されています。国史跡となつている安国寺遺跡から発掘されたという、建築材や土器をこの目で見ることが出来ました。

次に長木家墓地を見学しましたが、住宅の裏山にある墓地は少々荒れていました。しかし、三・九三トリスの国東塔と、三・三六トリスの板碑に大きく深く刻み込まれた梵字が目を引き、古色蒼然たる佇まいでした。私には最も立派な石造物の様に強く印象づけられました。



岩戸寺の国東塔（重文）

そのあと山本氏宅へ案内されて、小休止の後石戸寺に行きましたが、この国東塔は弘安六年(一一八三)の造立で、国指定の重文です。私には大へん優しい姿に感じられました。茅葺き屋根を修理中の堂宇と石造物が、大きな杉や檜の林の中に静かに佇んでいます。旧正月七日には修正鬼会が催されるので、是非一度は拝観したいものです。

それから車は次の見学地文珠仙寺に向かいました。日本三文珠の一つで、周囲の景観は中国の俄眉山に似ているとか、役の行者が大化四年(一三〇〇)年前開基以来、文珠菩薩信仰と修行の霊場として、今日まで栄えているとの由です。天然記念物に指定された自然林と、苔むした三百段の石段を上がると仁王像が迎えてくれます。ここでも住職の説明がありました。気合いの入った方で、何年か前テレビで会ったことを思い出しました。それは六郷満山の峰入り行や、修正鬼会で白い法衣をまとった修業僧でした。あの時泣きながら修行に体当たりしていた中学生のご子息は、今は大学で勉強中だそうです。祈る健闘です。

高さ八メートルの宝篋印塔やけやきの老大木、また、堂の背



日本一高い宝篋印塔(文珠仙寺)

後は凄まじい程の絶壁です。岩窟から湧出する霊水は知恵の水であるとか、森羅万象見るものすべてが、天台宗の厳しい戒律によって培われたものと思えました。

車はいよいよ両子寺に向かって山中を走ります。到着後昼食は早めに済ませ、揃って参詣です。ここでも護摩堂で住職の説明がありました。寺は元正帝の養老二年(七一八)、仁聞菩薩により開基された神仏合祀の天台寺院で、六郷満山の中心的な存在です。住職の言葉を借り

れば、国東半島はほぼ円形で、その中心が両子山であり、八方に谷が流れているという地形です。それを六郷に分けて、宇佐八幡の強力な勢力下に、他所にはない数々の寺社が創建されたので、満山と言われるようになったのでしよう。半島の根っこ部には富貴寺や真木大堂があり、中山本寺が両子寺となり、半島の東部が未寺とのことです。中央部は天台宗で占められ、中腹部は禅宗となり、海岸部は浄土宗や真宗の寺域となっているそうです。私には両子寺の国東塔や仁王像も立派なものと思いました。なお、国東には大きな寺院や在銘の石造仏塔とは別に、銘のない仏塔が殆どだそうです。これらのものはその昔、地域の人達が年月をかけて、苦勞を重ねて造ったものでありましよう。

国東の山野には、これら大衆が祀った野仏が数多くあるそうです。厳しい修行と共に、温もりを感じる仏の里の姿です。奥の院にもお参りしました。両子寺は堂塔も多く参詣者も常時にぎわっている様に見うけました。ここで今日一日、ご親切に案内して下さいました山本氏に、感謝の言葉を述べながらお別れしました。

最後は大田村の財前墓地に寄りました。国指定の重文



財前墓地の石塔群

である国東塔（元應三年へ一三二一）や、五輪塔が百基近くもある墓地の大部分です。鎌倉から室町にわたる財前家の豪族ぶりが想像されました。

帰路は大田村の里を下って、白髭神社（通称どぶろく神社）前を通り十号線に出ました。佐伯では史談会の人達と再会を約してお別れです。また今秋も揃って西国東を巡ることが出来ますよう、願ってやみません。